

してもらおう体験による心地よさの形成の意義

How Contentment in Children is Created by their Experience of Being Indulged

西垣 吉之* 山田 陽子* 西垣 直子** 馬場 佑真***
Yoshiyuki NISHIGAKI Yoko YAMADA Naoko NISHIGAKI Yusin BABA

本研究では、子どもが保育者からの「してもらおう体験」による心地よさの形成の意義を明らかにするとともに「してもらおう体験」の重要性を確認するために、子どもが心地よさを感じ取っていると思える筆者自身の保育実践記録および保育観察記録から事例を抽出し、考察した。

してもらおう体験によって子どもの心の中に形成される心地よさの根源にあるものは、子どもが自分の大切な人から愛されているという実感であり、そのことによってもたらされる、自分の存在を支える柱ともいえる安心感や安定感である。そして子どもは、してもらおう体験による心地よさの形成のみで満足することなく、してあげる体験による心地よさに気づき、自分で自分にしてあげる体験や他者にしてあげる体験をも積み重ねていくことになる。

キーワード：心地よさ、してもらおう体験、してあげる体験、子ども、保育者

はじめに

平成20年の保育所保育指針改定における保育の内容において、教育的側面もさることながら、養護的側面の重要性が強調されている。例えば「保育園が乳幼児にとって安定した生活の場となるために、保育者は子どもと生活を共にしながら子どものあるがままを受け止め、その心身の状態に応じたきめ細やかな援助をしていく必要があること」、「保育者が子どもの欲求を察知し丁寧に対応し、時には励まし、子どもと向きあうことにより子どもが安心感や信頼感を保育者に抱くようになること」、また「保育者と信頼関係が形成されることで身近な環境への興味や関心を高め活動の場を広げること」、さらに「保育者の養護的な関わりやその姿を通して、子どもが望ましい生活の仕方や習慣・態度を徐々に体得していくこと」が押さえられている。

筆者らはこの生活に必要な習慣や態度の形成の基盤にあるものは、保育者によって子どもになされる「してもらおう体験」であると考えている。

子どもがしてもらおう体験によってもたらされる「心地良さ」を何度も味わうことによって、その心地よさを再度体験しようとする意志が子どもに働き、それが結果的に望ましい生活の仕方や習慣・態度の形成を促していく根幹になると考える。

研究の目的と方法

筆者等は2003年度中部学院大学中部学院大学・短期大学部紀要第4号において「人は心地よい状態にあるこ

とを本来望む存在であること」「人は快の状態を求めその方向に向かって心を働かせるものであること」「快の状態を求める気持ちの働かせ方はそれぞれの年齢やおかれた状況性によって異なってくるものであること」を明らかにしてきた。

また、心地よさというキーワードからさまざまな事例を読み解く中で、子どもはその時の心地よさを成立させるために、心の働かせ方が複雑になっており、そのこと自体が子どもの心の育ちといえることも分かった。

さて、子どもは何かの葛藤状態に陥ったとき、気持ちをかき乱されることになる。その感情の乱れに対して、子どもは、自分が心地よいと思える方向に向けて心を動かしながら、安定をはかろうとする。こうした心地よさを求める心の働かせ方はどのような体験や育ちの中で起こるのだろうか。その基盤にあるものは生理的な欲求を満たされたり、身体感覚からもたらされる心地よさを繰り返し味わう経験である。そうした感覚的な快の状態を繰り返し体験することによって、心地よい状態が子どもの中に位置づき、それが心に安定をもたらしことになる。また、それがその子にとって普通の状態となり、その普通の状態が一つの基準となるのである。子どもにとって「普通」とはつまり感情の揺れや振幅が少ない状態であり、気持ちが安定した状態と言えよう。つまり自分の安定した心の状態を求めて子どもは様々な調整をはかるのではないかと考える。

生理的欲求の充足や身体的接触による心の充足は、周囲の大人によって与えられることによって形成されるひとつの基準を子どもに与えることになる。こうした基準を形成することを通して、子どもは、その時味わった心地よさを再現しようと、心を動かしていくようになる。

その心の働かせ方が、意志をもって自ら環境に働きかけようとするエネルギーを生むことになるものと予測できる。

本研究では、子どもが保育者からの「してもらう体験」による心地よさの形成の意義を明らかにするとともに「してもらう体験」の重要性を確認するために、子どもが心地よさを感じ取っていると思える筆者自身の保育実践記録および保育観察記録から事例を抽出し、考察した。

結果と考察

1、生理的な欲求が満たされることの心地よさ

事例

生後間もなくのJ男の泣き方は、激しさはなく、弱々しいものであった。母親は注意深くJ男を見守り、世話を続けた。3週間たった頃、特に、空腹になると、周りの大人に対して戦闘的に訴えるような激しい泣き方をするようになった。

子どもは誕生以来、大人にしてもらうことによってもたらされる心地よい状態を繰り返し経験する。その中で子どもは満たされることによる心地よい状態と心地悪い状態を対峙的に感じるようになる。そして心地よさを求める意志が芽生え始めるようになる。ここでは空腹を満たすことへの欲求をさらに強く外に表そうとし、ある意味で怒りに似た感情を出し始めたと思われる。心地よさと心地悪さを示す怒りは、一見相反する感情の動きのようにみえるが、実は表裏の図式の中に組み込まれていると言える。

そして、空腹を満たすという生理的な欲求の充足によってもたらされた心地よい状態は、自分の心地悪さを受けとめてくれて、心地よい状態になるような関わりをもってくれる大人の存在を意識することにつながっている。乳児期における身近な大人にしてもらう体験は、その後の、モノとのかかわりや人とのかかわりにおいても、人が心地よい状態をつくり、保持するために、行動する感覚の基盤をつくるといえる。

2、心の安定が保たれることの心地よさ

事例

0歳児クラスのK男(1歳3ヶ月)は入園当初安定して過ごしていたが、2ヵ月後にO男やM男が途中入園し、担任の眼差しが自分以外の子どもにも向けられることによって不安定になっていった。担任はそうしたK男の気持ちを受け止め、抱っこして二人だけの時間を努めて持つようにした。K男はすぐに

安定感を取り戻し、O男やM男が入園してくる以前の心地よい状態に戻ることができた。

それからしばらくして、K男がひとりでダンボールやかごに入って楽しそうに遊んでいる姿が見られるようになった。ある日、K男が担任と一緒に隣りにある1歳児の部屋に初めて遊びに行った。K男は初めのうちは落ち着かない様子だったが、担任から離れて近くの脱衣かごを見つけてすっぽりと入り込んだ。そしてかごの前を両手で持ち、ガタガタ揺らし始めた。次第にK男の表情が緩み、にこにこしながら揺らして遊び続けた。

K男にとって、かごやダンボールに入るという行為は、自分の身体を囲まれることであり、それは担任によって包み込まれる心地よさと同じような感覚をもたらすものであったようだ。K男は年下の子ども の出現によってもたらされる嫉妬や寂しさといった不快な感情を、保育者の身体に包み込まれることによって持ちこたえていたのである。一方、次に出現したダンボールに入るという行為は、自分におこった心地悪さを心地よい状況に変えるために、K男が編み出した方法といえる。

子どもは年齢が低ければ低いほど、心地よさは他者にしてもらう行為によってもたらされるものである。しかし、抱いてもらうことによってもたらされる心地よさをしっかりと体感した子どもは、いずれその心地よさを自らが創り出そうとし始める。そのような気持ちの動きが起こる基盤には養育者との関係性の中で生み出される“心地よさ”を体感しているかどうか深く関与しているものと思われる。

この事例では、保育者がK男の気持ちに寄り添い、その不安を素直に抱くという行為で受け止めたために、K男は自分が見捨てられない存在であることを再度確認することができた。結果的に、保育者との絆を確認することになり、保育者が他の子どもにまなごしを向けざるを得ないことがあることも少しずつ受け入れることができるようになり、一時的に保育者の気持ちが他児に向いて必ず自分にまなごしを向けてくれるという保育者への信頼感と自分の存在に対する自信が、自分で自分にしてあげる活動を生み出し、心地よい方向に自分の気持ちを仕立てて乗り越えていこうとするたくましが形成されていったものと考えられる。

3、愛されているという実感による心地よさ

事例

N子(特別支援学校幼稚部6歳)は、入園直後から親しい保育者に「上下(うえした)行くの」と要求を出し、抱っこされて階段を上がって2階へ行き、静かな空間で過ごした後「今度は下へ行く」といっ

て1階に戻ることを繰り返していた。子ども集団の中で生活することに緊張があったのだと思う。また親しい保育者が自分の期待に応えてくれる体験を積み重ねることで、保育者との信頼関係を定着させようとしていた。このやり取りが日課のように定着した頃、N子は新しい関係作りも始めた。まずは複数の子どもと保育者が集うホールの中央にあるランポリンの上で過ごし、かかわりたいと願っている保育者に「先生」と声をかけるようになった。N子は相手に自分の期待に応える気持ちがあるのかどうか自信が持てなくてためらいがちに小声で呼びかけるため、相手になかなか届かなかった。それで、回りの保育者はN子が「先生」と呼んだ時には自分の可能性があることを意識するよう申し合わせを行い、結果的にどの保育者もN子に心を開いた状態で近くに居るようになった。N子は安心して自分の願いを伝えられるようになり、かかわる保育者が増えていった。そしてそれぞれとの間に固有のやり取りを編み出していった。例えばN子が蛍光灯を指差すと相手が「まぶしい」と応えるとか、顔を見合わせて「うーん」といつつタイミングを合わせて「はっ」とびっくりした表情をするといった、シンプルで短いやり取りだった。出会って二人だけに通じるやり取りを交わすことがつながりの証であり、N子はそのやりとりを交わすために、自分が一番頼りにしている保育者を伴って勇んででかけていくようになり、行動範囲が広がった。その後、ひとりで出かけていくようになった。

N子の親しい保育者を伴っての階段の上り下りは1学期の間、日課のようになっていた。それは、自分は回りの大人に愛されていることを実感しようとしている行動に見えたため、その思いにしっかりと答えるために、おんぶを引き受けてきた。この事例が示す子どもにとっての心地よさは回りの大人に愛されていると実感しながら生きることといえる。

さらに足の弱かったN子が求めた次の段階の心地よさは、自分の足で自由自在に階段を上り下りすることになったように見える。そのことをまずは保育者の力をかりて実現していたのだろう。

保育者への呼びかけも親しい保育者の助けを受けながら始めたが、そのうちに自分でやれるようになっていった。

してもらおう体験が長く続くと自分でやろうとする意欲がもてなくなるのではないかという心配が大人の中には付きまとう。もちろんそうなる場合もあるに違いない。その時に私達に求められるのは、してもらおう体験がどういう意味を持つのかと言う見極めである。

4、自分を素直に表現することの心地よさ

事 例

N子(特別支援学校1年生)とS子は同じクラスである。S子は私とのつながりを作るために、電話ごっこを盛んにやっている時期があった。S子が差し出す受話器を受け取り、私が彼女の兄弟や父親を相手に見立てて会話するというあそびである。はじめN子は私のまねをして電話を受ける役をとっていたが「Nちゃんもやってみる」と言って、S子の立場になって私に続けざまに何度も受話器を差しだし、自分にとって親しい人を相手に見立てるように要求してくるようになった。

N子は自分のしてもらいたいことを相手に素直に表現できるS子に憧れを抱いている。「N子ちゃんもやってみる」とは電話ごっこの遊びそのものも指しているが、S子のように保育者に自分のしてほしいことを表明してみるという思いが込められている。

5、自分でできないことはしてもらい、できることは自分に任せてもらえる心地よさ

事 例

E子の通う園は服装もカバンも靴も自由で、それぞれの子どもの「自分」が、見える形で表現されている。午前中の園生活は、主に各自が自分で好きな遊びをみつけて過ごす。

4歳のE子はお気に入りの紐靴を履いて通園してくる。E子は靴紐を結んだりほどいたりする事がまだできないため、外へでかける時や室内に戻った時には、近くにいる保育者や年長の子どものできないことには手を貸すのが当たり前という感じで、自然に手伝う。E子はある時パズルで遊んでいて、そばにあった2センチ位のビーズ100個程を床に落とした。するとひとりでそれらを全部拾い集めてから、パズルの続きをやり出した。担任や他の子ども達は手を出さなかったが、自分で解決する事を自然に見守るような雰囲気にもまれていた。

E子と回りの人たちのかかわりから、子どもはできない事はしてもらおうことも含めて援助してもらえることに信頼を置いており、この信頼感に支えられて、できることは当然自分でやることもわかっているように見えた。

6、自分がしてもらって心地よい状況を相手に対しても作り出すことの心地よさ

事 例

D保育所の早朝保育を受ける子どもの中には朝食を持参する子どもがいる。給食室から食器と牛乳・お茶が乗ったワゴンが担任によって保育室に運ばれてきて、端にある机にテーブルクロスがかけられ、前もってお皿と受皿付きのカップが1セットで、4人分用意されている。子ども達の朝食はハムを挟んだサンドイッチやパンや果物である。それらをお皿にのせて、飲み物を各自で選んでついでいた。食べ終わると使った食器をワゴンにしまい、新しい食器を用意してからその場を離れた。

事前に用意されている食器を使用して朝食をとり、食後に片付けてテーブルを整え、新しい食器を用意する。この一連の行動は自分で用意して自分で片付けるのと同じでありながら、そこに込められている意味合いは異なる。自分のために誰かが用意してくれたものを使用することは相手の真心を受けることであり、心地よい状態である。そして自分が受けた心地よさを今度は自分が次に食事する誰かのために用意してあげるというように、してもらったこととしてあげることの両方を体験していることになる。毎日繰り返すこの行動をとおして、自分にとって相手にとっても心地よい状態を作るといふ、更なる心地よさを求める気持ちが育っている。

7、相手の要求に応える心地よさ

事 例

Y男(5歳児)の園の昼食の際は飲み物は水とお茶があり、日頃は各自が選んで担任についでもらう。ある時担任が水を配る段になって電話が入り、クラスから出て行った。Y男が自分でやろうとワゴンからボトルを取り出すと、他の子どもが「ついで欲しい」と手をあげた。Y男はまずその子達の席を回って要求する量をついでやり、最後に自分のコップについだ。コップ半分にも満たなかったため、よそのクラスから調達してきた。

Y男は自分の水を確保せずに、友達に水をついで回る、しかも相手の要求する量を借しげもなくついでまわる姿が印象的である。この背景には、水がなくなったら他から調達して来ればよいという見通しがしっかり持っていることが大きいと思われる。Y男の姿から、日常的に、担任によって自分の要求に応じてもらっている心地よさを知っている子どもは、安心して他の子どもの要求に応え、心地よさを相手にもたすことができることを物語っている。

8、互いの意思を伝え合うことの心地よさ

事 例

好きな遊びの時間に、E子(4歳児)がB5大のコルク板に釘穴のついた三角や四角・動物等の色板に釘を打ち付けて遊んでいた。E子は遊び終わると、傍で楽しそうに見ていたI子に「使う?」と意向を聞いた。I子が「使わない」と応えると、「うん。わかった」という感じで片付けを始めた。

相手に自分の意思を聞いてもらうことは、自分の存在を大事にされているという実感が持てて、心地よいものである。ここでは担任の直接的な関わりはみられなかったが、子ども同士のやり取りから、日頃担任が一人ひとりの子どもの意向を尊重していることが伺えた。

9、してもらったことへの感謝の気持ちを表現する心地よさ

事 例

3歳児が給食のために部屋に集まり始めたときのことである。私は見学に来ていて、外で遊んでいた子ども達と一緒に戻ると、F子が保育室の入り口のところにできている水たまりを、箸箱や布ナプキンも入ったままの給食袋で拭いていた。おもしろだと分かった。近くにあった雑巾を差し出して「これを使ったらどうかしら?」と声をかけるとF子は「ありがとう」と応えて受け取り、拭きとっていった。

私はF子に任せた方がいいと思いその場を離れて、しばらくしてから戻ると、彼女は着替えの最中だった。給食袋やナプキンなどは担任の手で干してあった。私が傍にいくと、F子はニコニコしながらカバンから折り紙で折ったチューリップを出して、「好きなのをあげる。タオルを貸してくれたから」とプレゼントしてくれた。それから「絵も描いてあげる」と言って、A4サイズの画用紙にピンクのクレヨンで自分と私のニコニコしている全身像を描いてくれた。

F子は私にしてもらったことで感じ取った心地よさによって私への感謝の気持ちを持ち、気持ちを形にするためにプレゼントを贈ったといえる。プレゼントを受け取った私の喜ぶ顔を見て、ますますうれしくなり、心地よさが増す体験をもっとしたいと願うことだろう。

10、相手の行動を受けとめて一緒に心地よい状態を作り出していく心地よさ

事 例

2歳児クラスのU子とR男がままとで遊んでいた。U子が使っていたプラスチックの包丁をR男が欲しがったので、私が別の包丁を渡すと、R男がまるでフェンシングのようにU子の包丁に自分の包丁を当ててカチャカチャやりだした。予想外の展開だった。R男は活発で力も強く、遊びに夢中になると行動がエスカレートすることがある。U子は兄がいるためか、少々のことではめげない人だった。U子のたくましさを頼りに、R男がU子に怒って抗議しているのか、一緒に遊ぼうとしてちょっかいを出しているのか、思いを少しでもつかんでから間に入りたいと思案していた。U子もはじめは戸惑っているように見えたが、すぐにうれしそうに「かんばい」と言って自分の方から包丁を向けていった。U子はR男の一見乱暴に見える行為の中に「一緒に遊ぼう」という表現が込められていると受け取ったのだろう。R男もすっかりその気になって、U子の提案を受け入れて、にこにこしながら「かんばい」をくり返していた。U子の父親は毎晩晩酌をしており、その際にU子や兄の期待に応えて、乾杯をしているのだった。

U子は自分の期待に応じて乾杯してくれる父親のように、自分もR男の期待に応じてあげたかったのだろう。R男もU子の申し出を自然に受け止めており、楽しさを共有することにつながっている。

11、相手の立場に立って相手を思いやることの心地よさ

事 例

3歳児クラスの給食のとき、担任が「おかずはありますか」「牛乳はありますか」と子ども達に確認した。一人の女の子が「先生、『牛乳ありますか』ってさっき聞いたよ。」とありのままを指摘すると、担任は「ごめんなさい。先生言った事忘れちゃってたわ」と素直に謝った。すると他の女の子が「私も忘れたことある」と嬉しそうに言った。回りの子ども達も「ボクも」「私も」と嬉しそうに言い合っていた。

子ども達の発言から保育者も忘れる事があることで自分と同じという喜びも伺えた。しかし私が印象に残ったのは「先生、間違えたっていいんだよ。大丈夫」と励ましているように聞こえたことだった。子どもなりに大事な先生を庇おうとしているように見えた。その時、保育する立場と保育を受ける立場が逆転していると感じた。日頃は保育者にしてもらったり、庇ってもらったりし

て、心地よい生活を送っている子ども達はそれだけで留まるのではなく、何らかの形で大好きな保育者の役に立ちたいと願っている。保育者が心地よく過ごしていることが子どもの喜びでもあるのだ。保育者は子どもの前で万全である事が大事なのではなく、子どもの前で正直である事が、子どもの気持ちを豊かに育む事につながる事を実感した。

12、自分の要求を変えることで作り出す相手と分かち合える心地よさ

事 例

A男(特別支援学校4年生)は車に関心があり、毎日のように車道に面した保育室の窓から車の往來をみていた。A男は保育者と手をつないだりするような体のふれあいを望まない。私は違う形で何とかA男と心を触れ合わせたいと願って傍にいた。A男は好きな車が通ると車名を言い、私にも同じように言ってもらいたがる。A男は発音が不明瞭だった。私はA男の発音に馴れていないのでなかなか聞き取れなかった。私が想像して車の名前を言い、当たっていると喜ぶ。違くと2・3回くり返してくれる。それでも解らないでいると彼は歌いだすのだった。曲は決まって『まつぼっくり』と『アイアイ』だった。母親によればA男はいろいろな歌を歌えるとのことだった。A男は敢えて誰でも知っている曲を選んでいたのでと思う。私はA男が歌いだしたときには「助け船をだしてくれてありがとう」「一緒に居るのがうれしいわ」という気持ちで歌っていた。

A男がこの時に一番してもらいたいのは、自分の好きな車を見て名前をいってもらってことである。それが叶わないとき、次に求めたのは、A男が好きな歌と一緒に歌ってもらってことだった。結局A男がして欲しかったことは自分の楽しいことを一緒に楽しんでもらうことである。A男は心地よさを手に入れるために、積極的に折り合いをつけている。

13、友達と共感しあうことの心地よさ

事 例

A男(特別支援学校3年生)は歌うことが好きで自分でも声を出して歌うが、周りの保育者と一緒に歌うことが大好きである。T男も歌は好きだが、声を出して歌うことはなく、自分から歌ってと相手に要求することもない。T男のお気に入りの歌は「にこにこぷん」(NHKの子ども番組のテーマ曲)である。T男が発作の後や体調が悪くて横になっている時、私は「応援しているからね」という思いをこめてよく歌った。するとT男はまじまじと私の顔を見

てにこっとするのだった。「先生、だいじょうぶだよ」と私を元気づけてくれる気持ちが伝わってきた。

ある日私はいつ起きるかわからないT男の発作を心配しつつ、ひとりで自由に動きたがっているように感じて、保育室から出て、廊下側の窓から見守ることにした。そこへA男が戻ってきて、入り口でT男の様子をみながら「にこにこぶん」を最後まで歌って遊びに出かけて行った。この時期T男はベットで横になることが多かった。A男の姿からは「T君、元気になってよかったね」という思いが伝わってきた。またある時、A男と私とN子の三人でそれぞれの好きな歌と一緒に歌っていると、T男が私たちのそばに座り込んで文字積み木で遊び始めた。するとA男はT男の好きな「お話ゆびさん」を歌いだし、それに合わせて三人一緒に歌うと、T男がずっと立ち上がって嬉しそうに私たちのところへ来て、音楽に乗って体を揺らし始めた。4人で歌って踊って楽しく過ごした。

A男は事例12のように、繰り返しいろいろな大人に自分の好きな歌を繰り返し歌ってもらってきた。A男の姿から、T男も自分と同じように保育者や友達と一緒に歌うことを喜ぶに違いないというような共感が伺える。T男の好きな歌をあえて歌ってあげている姿に「T男君も僕らと同じで、みんなで一緒に歌うのがすきなんだよね」と語りかけていることが伝わってきた。

14. してもらう体験の中でその時々自分の内面を表現し、受けとめてもらえることの心地よさ

事例

K男(特別支援学校幼稚部5歳児)を担当し、最初の2ヶ月は全くと言っていいほど私に関心を向けようとしなかった。ところが、6月のある日、突然という形で、K男が私をトランポリンに誘った。その後、K男は毎朝登校するとすぐにトランポリンに上がり、私を誘っておんぶされるようになった。初めに母親と跳ぶこともある。K男は顔とお腹とを私に密着させ、腕は脇の下から胸に回して触れている。高く跳ぶと落ちるような姿勢なので穏やかに跳ぶことを要求していると思いゆっくり揺らした。

K男がトランポリンでおんぶされる時間は1時間から2時間位で、満足すると降りてひとりで遊び出す。登校中に母親に叱られたとか風邪気味だとか、心身の調子が悪い時に時間が長くなった。

K男は自分の気持ちの状態によって、元気なときは激しく、落ち込んでいるときはあまり揺らさないように求めてきた。私はそれに応えようとした。そうしながらK男は自分の気持ちを立て直していった。

K男は一人でもトランポリンを跳んでいたが、初めの頃は他の人がのってくるとすぐに降りるのだった。相手の跳び方やリズムに合わせて跳ぶのが難しかったのだった。

しかし、私とのトランポリンが日常的になってしばらくして、K男がトランポリンに乗ろうとする時に他の子どもが先に乗っていても乗り込み、K男の後に他の子どもが乗り込んできても降りないで、途中で相手の子どもに背中を押されて降りるように要求されると、K男は一度は降りるものの、泣かずに頃合をみて再度乗って行くようになった。

これまで自分の望む跳び方やリズムに合わせてもらうことで得ていた心地よさを今度は相手との間で自分で作ろうとしているように見えた。

K男は私がトランポリンにいるK男の傍を通ったり、一緒に乗っている時に、私の視線を捉えて時には指差しをしながら「やまだ」「やまだ先生」と呼びかけてくるようになった。返事をするとまた呼びかけてきて、10回程名前前の呼びあいになった。トランポリンを介してのかかわりが信頼関係をもたらしたといえる。

おわりに

してもらう体験によって子どもの心の中に形成される心地よさの根源にあるものは、子どもが自分の大切な人から愛されているという実感であり、そのことによってもたらされる、自分の存在を支える柱ともいえる安心感や安定感である。そして子どもは、してもらう体験による心地よさの形成のみで満足することなく、してあげる体験による心地よさに気づき、自分で自分にしてあげる体験や他者にしてあげる体験をも積み重ねていくことになる。

このように、してもらう体験の意義は心地よさを体感することであり、いずれその心地よさを自ら創りだそうとする意志を形成することにある。また、大人によってもたらされる心地よさの体感が、子どもが主体として望ましい生活を展開していくための基盤を成すものにつながっていくといえる。

してもらう体験は、保育者側からすればしてあげる体験である。それは保育者が丁寧に子どもに向き合う事を意味する。しかし、保育現場においては、事務量の増大や保護者への対応の煩雑さによって子どもと向き合う時間が徐々に減りつつあるという実感を持っている保育者も多い。一方、発達障害を抱えているわけではなく、親の養育力の低下によって保育の場で気になる姿を示す子どもの対応に苦慮している現状がある。その気になる姿が、小学校低学年児童の気になる子どもの行為につながっているケースもあるのではないだろうか。

気になる子どもの一番の問題点は存在感の危うさにあ

る。存在感とは子ども自身が「自分は自分の大事な人に愛されている」「自分はこの場所に居て、自分らしく振舞うことが尊重されている」と感じることができるということである。存在感の危うさの背景には大人によって自分のためにしてもらった体験の不足が考えられる。彼らは食欲に回りの大人からの暖かいまなざしや自分のためにしてもらった体験を求めている。

どの子どもにとってもしてもらった体験は必要であり、保育者はその子の育ちに応じたしてあげる関わりを持つことが大きなひとつの役割である。

保育者は、子どもに内面と行動が伴った自立を育むためにも、子どもに対して「してあげる」ことの意味を認めて、より柔軟な関わりをしていくことが望まれる。

参考文献

- (1) 津守眞「保育者の地平」ミネルヴァ書房 1997年
- (2) 鯨岡峻・鯨岡和子「保育を支える発達心理学」ミネルヴァ書房 2001年
- (3) 大場幸夫「こどもの傍らに在ることの意味」萌文書林 2007年